教育哲学会第64回大会

プログラム

2021 年 9月 13日（月）～ 19日（日）

@ 愛知教育大学（オンライン）

PESJ 2021

教育哲学会 第64回大会 準備委員会

大会案内

教育哲学会第 64 回大会を、9 月 18 日（土）・19 日（日）の両日を中心に開催いたします。新型コロナウイルスの感染の収束が見込めないことから、昨年度の第 63 回大会に引き続き、本大会もオンラインでの開催となります。

一般研究発表は、大会サイトへの発表原稿の掲載をもって発表とし、質疑応答は大会期間中にサイト内の掲示板を使って行っていただく形式とします。

課題研究（理事会企画）と研究討議（大会校企画）は、大会サイトへの発表原稿または発表動画の掲載をもって提案者の報告とし、18 日（土）ならびに 19 日（日）の所定の時間にオンライン会議システム（Zoom）を用いて質疑応答を行います。

次世代育成企画委員会企画、ラウンドテーブル、総会（教育哲学会奨励賞受賞者発表含む）は、18 日（土）もしくは 19 日（日）の所定の時間にオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

大会への参加は、事前申し込み制となります。

制約の多い形での開催となり大変心苦しく思いますが、できる限り充実した議論の機会になることを願っています。会員の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

大会参加申込みについて

1. 本大会はすべて事前申し込み制です。以下のフォームより、8 月 20 日（金）までにお申し込みください。学会ホームページからもアクセスできます。申し込みの期間が短く申し訳ありませんが、よろしくお願いいたします。（8 月 31 日（火）到着分まで参加申し込みは受け付けますが、「開催要項」のお届けが遅れますことをご了承ください。）
2. 大会参加費は無料です。
3. 参加者は、本大会のすべてのプログラムに参加していただけます。
4. 本大会は、教育哲学会会員のほか、非会員の臨時的な参加も受け付けます。臨時的に参加を希望される方は、推薦者（会員）1 名を依頼の上、以下のフォームからお申し込みください。ただし、場合によっては参加が認められないこともありますことをご了承ください。

https://forms.gle/VoHSzfYGmmRPALAX9

大会日程

<table>
<tr><td>9 月 13 日（月）</td><td>12:00</td><td colspan="2">大会サイト公開</td></tr>
<tr><td>9 月 15 日（水）</td><td>12:00</td><td colspan="2">一般研究発表の質疑応答開始</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9 月 18 日（土）</td><td>13:00 – 14:30</td><td>次世代育成企画委員会企画</td><td rowspan="3">Zoom での開催</td></tr>
<tr><td>15:00 – 16:30</td><td>研究討議</td></tr>
<tr><td rowspan="5">9 月 19 日（日）</td><td>10:00 – 12:00</td><td>ラウンドテーブル</td></tr>
<tr><td>12:00 – 13:00</td><td colspan="2">昼食休憩</td></tr>
<tr><td>13:00 – 14:00</td><td>総会</td><td rowspan="2">Zoom での開催</td></tr>
<tr><td>14:15 – 15:45</td><td>課題研究</td></tr>
<tr><td>17:00</td><td colspan="2">大会サイト閉鎖</td></tr>
</table>

※ 大会サイトの URL、次世代育成企画委員会企画、研究討議、ラウンドテーブル、総会、課題研究の Zoom の接続 URL は、8 月下旬に参加申込者にお届けする予定の「開催要項」にてお知らせします。

各プログラムの実施方法

Ⅰ　一般研究発表

1. 一般研究発表は、大会サイトにおける発表原稿の公開をもって、学会大会において研究発表を行ったことと見なします。発表原稿の著作権は発表者に帰属します。
2. 大会サイトにおける発表原稿の公開は、学会誌への論文の投稿ないしは掲載を意味するものではなく、学会誌における「既発表論文」の扱いとはなりません。
3. 参加者は大会サイトから発表原稿を自由にダウンロードできます。
4. 一般研究発表に対する質疑応答は、大会サイト内の掲示板機能を用いて行います。掲示板への質問の投稿は、9 月 15 日（水）正午から可能です。質問を投稿される際には、回答のための時間を考慮に入れて余裕をもって投稿してください。大会サイトの閉鎖直前に質問が投稿された場合や発表者が質問の投稿に気づかない場合などには、大会期間中に質問への回答が投稿されない場合があることをご了承ください。
5. 質疑応答の投稿にあたっては研究倫理を厳守していただきますようお願いします。

Ⅱ　次世代育成企画委員会企画

1. 次世代育成企画委員会企画は、大会 1 日目（9 月 18 日（土））13:00～14:30 にオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Ⅲ　ラウンドテーブル

1. ラウンドテーブルは、大会 2 日目（9 月 19 日（日））10:00～12:00 にオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Ⅳ　研究討議 ・ 課題研究

1. 研究討議と課題研究は、大会サイトへの発表原稿または発表動画の掲載をもって提案者の報告とします。
2. 研究討議は大会 1 日目（9 月 18 日（土））15:00～16:30 に、課題研究は大会 2 日目（9 月 19 日（日））14:15～15:45 に、それぞれオンライン会議システム（Zoom）を用いて質疑応答のみ行います。

一般研究発表

第１部会 ： 教育における正義とケア

司会：伊藤 博美（椙山女学園大学）
井谷 信彦（武庫川女子大学）

子どもの道具使用をめぐる現象学的アプローチの検討
―ハイデガーの「日常性」を手がかりに―

森 七恵（京都大学・院生）

N.ノディングスのケアリング論の再評価
―ジェンダー的特質を巡る議論を手掛かりに―

坂本 達也（広島大学・院生）

非理想的な教育の認識的目的論 ：
道徳と認識のハイブリッドな目的論に向けて

佐藤 邦政（茨城大学）

熟議民主主義的市民形成論における私的領域の位置
―公私二元論に対するリベラリズム／フェミニズムの議論に着目して―

平井 悠介（筑波大学）

第２部会 ： 教育思想と歴史･社会

司会：鈴木 由美子（広島大学）
櫻井 佳樹（香川大学）

ベンヤミンのイロニー解釈の教育学的含意について ：
ドイツ・ロマン主義論を手がかりに

浅井 健介（奈良教育大学）

フンボルト陶冶理論における規範性の問題

柳田 和哉（京都大学・院生）

ペスタロッチ『わが祖国の自由について』の再検討
―スイス史研究の動向を踏まえて―

椋木 香子（宮崎大学）

倉橋惣三・保育論における自然概念と日本の保育特有の心性

弘田 陽介（福山市立大学）

第３部会 ： 人間形成における個と普遍

司会：平石 晃樹（金沢大学）
藤田 雄飛（九州大学）

メルロ＝ポンティにおける経験伝達の問題
―カントとの比較を通じて ―

常深　新平（慶應義塾大学・院生）

J.H.ニューマンの教育思想における構想力の検討

青木 由紀子（上智大学・院生）

エマニュエル・レヴィナスの「教え」概念の射程の再検討
―「隠喩」概念に着目して―

中川 弘輝（東京学芸大学・院生）

A・N・ホワイトヘッドの教育論における「想像力」

小島 聖矢（名古屋大学・院生）

思想世界の形成と人間形成の解釈学
―リクールの思想から教育学への応答の可能性―

朝岡 翔（大阪体育大学）

MEMO

次世代育成企画委員会企画

教育哲学研究と博士論文の執筆
―学位取得に向けて／を越えて教育哲学を展望する―

企画者：次世代育成企画委員会
下司 晶（中央大学）
生澤 繁樹（名古屋大学）
井谷 信彦（武庫川女子大学）
小野 文生（同志社大学）
平田 仁胤（岡山大学）
室井 麗子（岩手大学）
司会者：生澤 繁樹
小野 文生
話題提供者：河野 桃子（信州大学）
嶋口 裕基（名城大学）
谷村 千絵（鳴門教育大学）
門前 斐紀（金沢星稜大学）

次世代育成企画委員会では、教育哲学と論文査読・投稿（2017 年度）、教育哲学とフィールド研究（2018 年度）、教育哲学と国際化・国際交流（2019 年度）、教育哲学と世代を超えた学術交流（2020 年度）といったテーマをこれまで取りあげてきました。第 5 回目となる今年度の企画では、「博士論文の執筆」について考えてみたいと思います。本学会で活躍されている研究者を話題提供者としてお招きし、体験談を共有させていただくことから、比較的研究歴の浅い会員と同世代・異世代の会員とのあいだの緩やかな交流や意見交換の場をもちたいと考えています。

ところで、教育哲学や教育思想の領域における博士論文とは、いったいどのようなものでしょうか。また、みずからの研究を進めたり、まとめたりするにあたって、博士論文の執筆はどのように位置づけられるものなのでしょうか。そして、博士論文として取り組んだ研究は、その後の研究にとって、どのような意味をもつのでしょうか。博士論文といっても、教育問題を追究するものもあれば、人物や思想に光を当てたものもあるでしょう。また、哲学的な方法をとるか、思想史的な方法をとるかという点でも、博士論文の執筆のために求められてくるものは、大きく異なってくるはずです。

博士論文を執筆し、学位を取得することがすべてではありません。学位取得のためだけに、教育哲学の研究をおこなうわけでもありません。しかし、学位を取得することの意味は、教育哲学や教育思想の領域においても、年々大きく変わり続けています。とりわけ、比較的若い世代の研究者にとっては、ますます切実な問題となりつつあります。学位取得は、各大学機関における固有の制度や文化に左右され、それゆえ学会の関与するところではないとも考えられてきました。しかし、学会もまた、こうした学位取得を取り巻く状況の変化とともに、間接的にしろ、学位制度と深くかかわっているといえます。

学位授与という制度的なもののなかでみずからの研究を意味づけていくことは、いうまでもなく、葛藤や抵抗に満ちた苦難の道のりであるかもしれません。また逆に、制度と研究との折りあいのなかで、新たな展望が切り拓かれることもあるかもしれません。博士論文への向きあい方はもとより、博士論文の執筆に取り組む時期や期間は、研究者によってさまざまです。課程修了とともに博士の学位を取得する方もいれば、大学院を満期退学した後に、課程内での学位取得をめざしたり、論文博士として研究成果をまとめたりすることもあります。いつ学位を取得するかという時期の違いだけでなく、博士論文への想いにもそれぞれに違いがあるのではないかと思います。

今回の企画では、所属する大学や世代を越えた、さまざまな体験談に触れることで、博士論文の執筆が意味することについて、みなさんと議論し、意見を交わすことができればと考えています。これから学位論文を執筆するという若い世代の研究者だけでなく、すでに学位論文をまとめられたという研究者の参加もお待ちしています。ここでは、学位取得に向けて博士論文を執筆することにとどまらず、もう少し射程を広くもちながら、学位取得という足元の課題を越えた教育哲学への展望についても、「博士論文の執筆」をテーマとしながら、ともに語りあうことができればと思います。

なお、この次世代育成企画委員会企画は、9 月 18 日（土）13:00～14:30 にオンライン会議システム Zoom を用いてリアルタイムで実施します。大会準備委員会から大会参加申込者に 8 月末頃に送付する予定の「開催要項」で招待 URL が周知される予定です。

研究討議

感情と民主主義の教育哲学

提案者：白銀 夏樹（関西学院大学）
室井 麗子（岩手大学）
高橋 舞（日本女子大学）
司会者：古屋 恵太（東京学芸大学）
野平 慎二（愛知教育大学）

政治的な共同存在のあり方を構想する上で、政治学と教育学は相互循環的な関係にある。政治学の規範的部門において望ましい政治形態が探究されるのと並行して、そのような政治形態を担いうる市民の形成はそもそも／いかに可能なのかを問うことが教育学の課題とされる。近代以降、望ましい政治形態のひとつとして民主主義が掲げられ、教育哲学においても民主的な人格の形成の原理と可能性がさまざまに問われてきた。その際の教育哲学的探究の基調として、「自然の理性化」を指摘することができる。感情や欲望といった自然性に振り回されるのではなく、理性によってそれを制御できる人間こそ、民主的な共同関係を構築できる主体としてふさわしい、というわけである。その代表的な構想として熟議民主主義を挙げることができるだろう。このような考え方の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。

けれども他方、現在の国内外の政治状況を見ると、しばしば論理や事実よりも、憎悪や不安、あるいは「見たい／信じたい」といった欲望が政治を動かす大きな要因となっている。民主的手続きを経て選出された代表による社会の分断の煽惑、ポピュリズムや原理主義の台頭、耳心地のよい近視眼的な政策の繰り出しなどを前に、民主主義の失敗が語られている。政治の主要な論点が、財の再配分からアイデンティティの承認へと移行しつつあるとも指摘されている。

このような状況に対し、感情を理性的に制御することの重要性と必要性をあらためて強調することも可能である。しかしながら、言うまでもなく民主主義という政治理念も理性的な人間像も、ともに歴史的社会的な条件のもとで生み出された所産であり、必ずしも普遍的な妥当性や内実を備えているわけではない。現代の政治状況を前に、理性的で民主的な理念からのその隔たりを批判的に検討することと並んで、政治的共同存在としての人間における非理性的なもの ── 感情（emotion） ── の位置づけや機能を再検討することも、教育哲学の重要な課題となるだろう。以上のような問題意識をもとに、教育哲学会第 64 回大会の「研究討

議」では、「感情と民主主義の教育哲学」をテーマとして掲げ、人間存在における感情の位置値を再検討し、それを踏まえた上で民主主義の可能性について探りたい。

もちろん、啓蒙主義以降、人間の理性的性格が前景に押し出されることが多かったとは言え、理性の能力に対して一定の留保を付し、感情の意義に注目する思索もつねに存在した。感情こそが道徳の源泉であると捉えたヒュームや人間精神の回復をディオニュソス的なものに賭けたニーチェはその代表格であろうし、知性に限らずプラグマティックな経験の総体を重視したプラグマティズムや、直感的な思考モードの重要性を指摘する現代の二重過程理論などもこの思想史の系列に含めることができるかもしれない。

今回の「研究討議」では、白銀夏樹氏（関西学院大学）、室井麗子氏（岩手大学）、高橋舞氏（日本女子大学）に登壇をお願いした。白銀氏には、実際に熱狂が民主主義を破壊する結果を招いたナチズム期と、それに対する否定弁証法的検討を展開したアドルノの研究の立場から、また室井氏には、啓蒙主義の時代に生きつつも人間理性への全面的信頼に疑問符を付し、理性に先立つ憐憫（pitié）に社会的共同性の基礎を求めたルソーの研究の立場から、さらに高橋氏には、支配的政治の圧倒的な暴力につねにさらされつつも、固有の自然観と世界観をもとに民主的な共同性のあり方を探ってきた歴史をもつ沖縄でのフィールドワークをもとにした共生教育の研究の立場から、テーマに関してそれぞれ報告していただく予定である。一筋縄ではいかない理性と感情の絡み合いと、そこから導き出すことのできる民主的、共同的生のあり方について、参加者の皆さんとともに考察を深めることができれば幸いである。

なお、研究討議は、大会サイトへの発表原稿または発表動画の掲載をもって提案者による報告とし、9 月 18 日（土）15:00～16:30 にオンライン会議システム（Zoom）を用いて質疑応答を行います。

ラウンドテーブル

ラウンドテーブル１

教育における分配的正義論の可能性（3）－指標と差異

企画者・提案者：髙宮　正貴（大阪体育大学）
橋本　憲幸（山梨県立大学）
児島　博紀（富山大学）
司会者：生澤　繁樹（名古屋大学）

昨年のラウンドテーブルを経て、教育の分配的正義を考える際には、正義（の原理や指標）と差異との関係を検討すべきことが明らかになった。たとえば、国境を越えて一定の教育を分配しようとすれば、文化的差異の尊重と教育の分配が衝突しうる。同様の構図は、子どもの生まれた家庭環境によって生じる教育格差を是正するための介入を要求する場合にも見られる。問われているのは、個人的・家庭的・文化的差異を尊重しながらも、同時にいかにして分配的正義の指標とそのパターンを正当化しうるかという問題である。

そこで、本ラウンドテーブルでは、（１）リベラリズムにおける機会の平等と家族、（２）ケイパビリティ・アプローチにおける教育の正義と差異の問題、（３）グローバルな正義論における教育と文化的差異の処遇という３つの観点から、教育の分配的正義論はいかなる指標を採用すべきか、種々の差異にどう対処すべきかなどについて検討する。

ラウンドテーブル 2

教育と徳理論

企画者・司会者：三澤 紘一郎（群馬大学）
提案者：佐藤 邦政（茨城大学）
立花 幸司（千葉大学）

徳（virtue）と教育の関係は、ほとんど内在的と言ってよい。性格の徳（e.g. 勇気、親切心）であれ、知的な徳（e.g. 好奇心、知的謙虚さ）であれ、徳および徳が発揮される行為への関心は、それらの徳をわれわれはどのように獲得するか、涵養するかといった変容／教育的側面への関心と不可避的に結びついている面があるからである。性格の徳を主題とする徳倫理学と知的な徳を主題とする徳認識論は、20 世紀半ば以降、さまざまなかたちで（再）進展してきた。

そこで本ラウンドテーブルでは、ミランダ・フリッカーの『認識的不正義（Epistemic Injustice: Power & the Ethics of Knowing）』（2007）の翻訳出版準備を整えられ、徳認識論や認識的不正義の議論から教育認識論を捉えなおす試みをされている佐藤邦政氏と、アリストテレス『ニコマコス倫理学』（2015）の共訳者であり、徳倫理学に精通されている立花幸司氏をお招きして、徳をめぐる議論が教育哲学研究をより豊饒なものにする可能性と展望を検討したい。

ラウンドテーブル３

技術革新と職業教育の思想史

企画者：松浦 良充（慶応義塾大学）
江口 潔（九州大学）
提案者：間篠 剛留（日本大学）
原田 早春（新潟大学／慶應義塾大学・院生）
江口 潔
松浦 良充
司会者：松浦 良充

これからの教育を哲学的に探究・展望しようとするとき、急激に進展する技術革新の動向とその意味に関する考察が欠かせない。特に AI 技術革新を中核とする「データ駆動型社会」では、現在の職業の構成や労働のあり方が劇的に変化することが予測される。もっとも技術革新が職業や労働とそれに関わる教育のあり方に大きな影響を与えることは、いまに始まったことではない。これからの技術革新と教育のあり方を探究・展望するための基盤として、本ラウンドテーブルでは、日本およびアメリカにおける職業教育の歴史的事例をもとに議論を試みる。

なお、本ラウンドテーブルは、公益財団法人カシオ科学振興財団研究協賛事業「「データ駆動型社会」における職業教育と教養形成の再構築」プロジェクトの一環として企画される。

MEMO

課題研究

「データ駆動型社会」における教育哲学の課題

―これからの教育にとって「データ」「情報」「知識」はどのような意味をもつのか―

提案者：鈴木　晶子（京都大学・理化学研究所）
山田　肖子（名古屋大学）
杉田　浩崇（広島大学）
司会者：松下　良平（武庫川女子大学）
松浦　良充（慶應義塾大学）

IoT（Internet of Things）の拡張、人工知能（AI）によるビッグ・データの活用、ロボティクス（Robotics）の発展・普及など、第四次産業革命とも称される急激に進展する技術革新は、社会構造と人間生活に大きな変動をもたらしつつある。その新しい社会像として描かれるのが、"Society 5.0"あるいは「データ駆動型社会」である。

そうした社会の到来は、「教育」や「人間」のあり方・概念にどのようなインパクトを与えるのか。教育や学びはどのように変容するのか、しないのか。あるいは私たちは教育をどのように変革してゆけばよいのか。

新しい社会における「教育」の問題を考えるとき、技術革新を担う「人材」の育成や新しい技術を利活用できるような方法としての「教育」に焦点化される傾向が見られる。また「シンギュラリティ」にかかわる議論に顕著なように、技術革新と「人間」の未来に、葛藤や対立の構図を読み込み、それに対抗的な「教育」を構想しようとする立場もある（「AI に負けない教育」など）。

しかしこれらの議論に共通するのは、社会構造の変化に対応した、役に立つ「人間」＝「人材」を育成するための「教育」という考え方である。いわば「教育工学」（educational technology）的な発想である。もちろん「教育」が、社会の変動に対して機能的に作用するという役割を担っていることは明白である。しかしそれは、「教育」が、産業革命以降（Society 3.0）、国民国家の発展やその経済・産業の成長に貢献する有力な装置として世界規模で組織化・制度化されるなかで優勢となった「教育」の考え方・概念である。その後、情報社会（Society 4.0）を経て、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」として想定される新しい社会（Society 5.0）において、こうした「教育」や「人間」の考え方・概念は保持されるのであろうか。この課題に取り組むことこそ、急激な技術

革新がもたらす新しい社会の到来に対する教育哲学独自の課題がある。

特に現在急激に進行している技術革新は、「データ」「情報」「知識」という、人間の知的能力の根幹を担ってきた諸概念やその相互関係に根源的な再構成を迫るものになっている。そしてそれは人間の学びや教育の様式自体の変革をも要請する。

本課題研究では、新しい社会における教育や学びのあり方・概念の変容について展望し、その理論的・思想的問題や実践的課題を明らかにすることをめざす。その際特に、新しい社会における「データ」「情報」「知識」の関係や意味の再構成に焦点をあて、その変化がこれまでの教育や教育学のあり方にどのような影響を与えるのか、さらにこれからの教育や教育学はどのような課題を担えばよいのか、について議論を深めたい。

なお、課題研究は、大会サイトへの発表原稿または発表動画の掲載をもって提案者による報告とし、9 月 19 日（日）14:15～15:45 にオンライン会議システム（Zoom）を用いて質疑応答を行います。

教育哲学会第 64 回大会準備委員会

【委員長】
野平 慎二（愛知教育大学）
【事務局長】
山口 匡（愛知教育大学）
【委員】
相澤 伸幸（京都教育大学）　安喰 勇平（茨城キリスト教大学）
寺川 直樹（長野県立大学）　平田 仁胤（岡山大学）
【連絡先】
〒448-8542　愛知県刈谷市井ケ谷町広沢 1
愛知教育大学教育学部学校教育講座　野平慎二研究室 気付
E-mail：pesj64aue@gmail.com

[表紙デザイン]
平野 純一（愛知教育大学大学院教育学研究科・院生）

PESJ 64 AUE